

*The Conduct of Life*におけるエマソンの自然観

—— *The Conduct of Life : Emerson's Tenacious View of Nature* ——

小 田 敦 子

(Atsuko Oda)

Ralph Waldo Emerson (1803-82) は最初の著作 *Nature* (1836) の後、1841 年と 1844 年に二つの代表的なエッセイ集、*Essays: First Series*, *Essays: Second Series* を出版し、講演者・エッセイストとしての文名を確立した。1849 年には *Nature: Addresses, and Lectures* として、*Nature* の改訂版を冠した説教や演説、講演集がまとめられる。¹ しかし、実際にエッセイ集が人気を博するようになるのは、1850 年以降、知識人を対象とした抽象的思弁的なテーマから、具体的個別的なテーマに転換してからのことである。50 年代には連続講演のタイトルをそのまま題名にした *Representative Men* (1850)、二度のヨーロッパ・イギリス旅行で得た知見を交えたフランスやイギリスの国柄についての講演から展開された *English Traits* (1856)、そして、やはり連続講演のタイトルを継承した *The Conduct of Life* (1859) が出版される。同題の最初の連続講演は 1851 年の 3 月から 4 月にかけて試行された。ピッツバーグの Young Men's Mercantile Library Association という実業家たちの団体のために行われた 6 回シリーズで、演題は“England”、“The Law of Success”、“Wealth”、“Economy”、“Culture”、“Worship” とあり (LL 1:227)、最初の二演題と“Economy”は後に出版されるエッセイ集にはないが、その他のタイトルは同じ順序で並んでいる。エッセイ集の巻頭に置かれた重要なエッセイ、“Fate”、“Power”と同じ題を付された講演は、同年 12 月、ボストンのフリーメイソンの会堂でのシリーズの中に、試行シリーズの冒頭の二演題の代わりに加えられた。同題による連続講演は演題の組み合わせを変えながら 1853 年まで続いた。また個々の演題による

講演は 1850 年代を通じて繰り返し行われた (Packer li)。

1848 年にイギリスから帰国して以後、エッセイ集の出版までの 10 年間は、エマソンの名声が広範な聴衆・読者を得て大いに高まる時期であった。1850 年代半ばのエマソンに『自然』以後変わらぬ「聖餐式、超自然主義、聖書の権威、そしてあらゆる形のキリスト教自体を最初に否認した人」であり続ける傑出した偶像破壊者を見た者もあれば (Richardson 524)、“the conduct of life”を中上流階級への成功の処世訓ととらえる「金びか時代」向きの要請があり (Richardson 491)、やがて「コンコードの賢人」と祀られ、後に George Santayana が指摘するような、快い風景と音楽に精神性を託す「お上品な伝統」を見る者もあった (Santayana 1+)。1850 年代のエマソンの著作からは宗教色が薄れ、世俗的になり、教育的或いは教訓的な面が強調される。つまり、1859 年にはダーウィンの *The Origin of Species* が出版されるように、エマソンの観念論がもつ「自然」への関心の新奇さが薄れ目立たなくなる。しかし、エマソンの時代の物質主義に対する批判、1840 年 4 月の日記に書きつけた、講演で言いたいことは唯一つ、エマソンが “the secularity of nature” (546) と呼んだ生成する自然の長大な時間の無限性に基盤を置く “the infinitude of the private man” (*JMN* 7: 342) を既成の宗教に代わるものとして主張するという考えの変わることはなかった。そのため同じ原稿を生涯にわたり繰り返し使うことに不都合はなかった。偶像破壊者としてのエマソンの自然観が 1850 年代の状況に対して、どのように表現されているかを以下に考える。

1. Natural History と Manners

エマソンはイギリスでの連続講演の準備として、三つの “Natural History of Intellect” に関する講演原稿に取り組んでいた (*LL* 1:130)。この「知性の博物学」とも「自然史」とも取れる自然の有機的な体系を意味する表題は、エマソンが 1870 年にハーバード大学で連続講演をする際に選んだ表題でもあり、エマソン終生のテーマであることがわかる。² イギリスでの連続講演は

Mind and Manners of the Nineteenth Century と題され、この表題による連続講演は帰国後のアメリカでも繰り返される。そのシリーズ第 1 回の講演 “The Powers and Laws of Thought” には天文学や化学に鼓舞されたエマソンの “a natural history of Intellect” (LL 1:139) を書こうという試み、精神の働きと自然の生成力とを結びつける試みが表明されている。また、その題が講演シリーズに冠されることもあり、また、1850 年代後半には、*Natural Method of Mental Philosophy* という連続講演を企画するなど、「自然の方法」への関心は変わらない。しかし、このシリーズに含まれる演題、“Country Life” と “The Natural Method of Mental Philosophy” からの選択であれば、講演の主催者、後に Emily Dickinson の助言者になる Thomas Wentworth Higginson の判断が典型であるように (LL 2:49)、前者が選ばれ、エマソンの「新しい形而上学」(LL 2:45) は一般的には魅力的でない主題であった。哲学だけでなく、19 世紀には科学自体も一般の人々には現在ほど身近な概念ではなかった。『種の起源』が出版された当時の状況からも、その 20 年以上前にエマソンの「自然の方法」が「汎神論」、「無神論」として避けられ、理解されなかったことは類推できる。一般的には “natural history” よりも “manners” が身近な関心のあるテーマであることを考え、エマソンは後者に「自然」を語らせようとする。*The Conduct of Life* の中の一章、“Behavior” ではエマソンは “Manners are factitious, and grow out of circumstance as well as out of character.” (865-66) と述べ、「作法」は人工的なもの、社会的な産物である面を強調している。しかし、「人格」には「自然」の入り込む余地がある。

「人格」は多分に精神的なものとみなされようが、エマソンはその精神を自然と結びつけようとする。エマソンの講演は、話の内容よりも、声や「作法」が強い印象を与えたと多くの人が語っている。そしてこれこそが、エマソンの思想が常識に対して偶像破壊的なため理解されにくく、現実的根拠のないと言う意味で「想像的」なものとみなされる大きな理由だが、彼が現実を批評する「作法」が自然の事実を前提にしているということを、1847 年 3 月、エマソンがクェーカー教徒の女性に宛てた手紙 (*Letters* 388-89) に見てみたい。エマソ

ンは“Absolute Being”(絶対的な存在)についていくら言説が積み上げられても、「単純な変えることのできない事実」を表現できなかったと述べて、こう続ける。

So I will not turn schoolman to-day, but prefer to wait a thousand years before I undertake that definition which literature has waited for so long already. Do not imagine that the old venerable thought has lost any of its awful attraction for me. (Cabot 2:500)

ここにはエマソンの“genteel”ではなく、「自然の方法」に特有の長大な時間のかかる進化の過程への認識に基づく時間感覚、人間が自然と共有する生まれながらに備わる力に拠って立つという意味で「生まれ育ちのよい人」であることを問題にする“gentle”な作法がうかがえるだろう。また、上記引用の後段でも、エマソンがこれまでに読んできた、そして自分の考えの表現者であるかのように共感してきたキリスト教の教父や思想家の思索の長い歴史への言及がある。その長い歴史を共有できることは自分という「私人の無限性」の証であり、「自己信頼」の根拠になりうると考える一方で、エマソンは牧師時代から自分の言葉が人に訴える力のあることを経験してきた人だが、自分自身は *Representative Men* で取り上げたような偉大な文人たち—ナポレオンを除く、プラトン、スウェーデンボルグ、モンテーニュ、シェイクスピア、ゲーテ—のように独創的な文才はないと考えていた。*Quotation and Originality* (1868) というエッセイで述べるように、引用する人も重要なのだという自負はあったであろうが (1035)、“every individual is only a momentary fixation of what was yesterday another's, is today his and will belong to a third to-morrow.” (1040) と述べるように、肉体であれ精神であれ、このような「自然の方法」である生成変化する「流動」に掉さず謙虚さが Nathaniel Hawthorne が “austere tenderness” (31) と呼び、Walt Whitman にエマソンを “a born democrat” (Richardson 529) と思わせたエマソンの特質、つまり、自然に由来する人間の「生」を遂行する方法であっただろう。

ホイットマンがニューヨークでのエマソンの講演の評を新聞に書いたのは1842年、ホイットマンは *Leaves of Grass* (1855) を贈呈して以後、エマソンの晩年まで何度か実際に会っている。エマソンは「生まれながらの民主主義者」だというホイットマンの評価は、エマソンの死後数年たったのものだが、エマソンの“manners”は自然の方法に親しいという本論のテーマに関わるものなので、もう少し考えてみたい。以下は Richardson によるエマソンの伝記からの引用である。

Whitman considered Emerson “a man who with all his culture and refinement, superficial and intrinsic, was elemental and a born democrat.” This judgment was in strong contrast to his assessment of Thoreau, whose great failing, said Whitman, was his “disdain, contempt for average human beings; for the masses of men.” (529)

ホイットマンは「教養と洗練」を“elemental”(自然の単純さと強烈さを備えた)と「民主主義者」と対照させながら並存させているが、それはまさにエマソンが *The Conduct of Life* で取り上げたテーマであり、エマソンが *Essays: Second Series* に収められた“Manners”の中で“natural aristocracy”(527)と呼び、*Mind and Manners*の講演シリーズに含めた“Natural Aristocracy”(LL 1:129)で展開したであろう古い貴族政を再定義する、人間が生れもつ力に関わるテーマである。ソローとの比較で言えば、知識層に向かって語られてきたエマソンやソローの言葉を「普通の人」にも開かれたものにする方法でもあって、現在では森の生活に特化した具体的な表現を残したソローやホイットマンがより広範な読者層から理解を得ているが、当時はエマソンが知識人としてはじめて「普通の人々」に語りかけることのできた、老若男女誰もが知っている、現代の言葉で言えば“Public Intellectual”と呼ばれるにふさわしい存在であった (Buell 40)。

The Conduct of Life というタイトルの意味自体、曖昧である。「普通の人」には、それは「処世訓」という意味で、人の生を、その多くは日々の社会生活

が占める人生をいかに営むかという意味で受けとめられるだろう。エマソン自身、この本の最初におかれたエッセイ“Fate”の冒頭で、時代の問題は、結局、“conduct of life”、つまり、「いかに生きるか」という「実質的な問題」(769)だと説明している。しかし、ソローの *Walden* (1854) の副題、“Life in the Woods” の“Life” がソローが描写した「生活」の記述と理解され易いけれども、ソローが書いたのはアメリカ社会の处世術が矮小化する人間の「生」に対するもう一つのあり方、自然が営む「生命」のあり方としての人間の「生」であったように、³エマソンが *The Conduct of Life* で問題にするのも、もう一つの自然の「生」をいかに人間の「生」に本質的なものとして、普通の人々の「生活」の中に位置づけ、そのようなもう一つの「生」に気づかせるかということだ。前述のホイットマンの評価にあるように、エマソンは“Public Intellectual”という自覚からも、普通の人の限界に対して、ソローよりも理解があった。これは 50 年代のエマソンに起こった変化とも言えるかもしれないが、エマソン自身の自然観によるもので変化していないとも言える。たとえば、これも前述の 1847 年の手紙で、「学校の先生」のように教条主義的な人を「今日」変えようとは思わないと述べているのは、その人が変わるには人間の時間の及ばない時間がかかるからであって、それは“Fate”の最初で述べられる「私たちの地質学は天体の巨大な軌道に及んではない」(769)という認識に等しい。それが自然の時間の中に置かれた人間の運命であり、しかし、同時にそれが「自由」を肯定する「力」に気づかせるものでもあることが *The Conduct of Life* 全体の主張でもある。個人の限界から、段階を経て人間が自然と共有する普遍的な生命の「力」に向かうという意味で、エマソンの自然観は変わらない。むしろ、*Nature* におけるよりも、自然への言及は明示的になってきているとも言える。ハーバード版エマソン選集の *The Conduct of Life* に歴史的背景を寄稿した Barbara Packer は、“Fate”を“the place of human thought in a universe of natural law” (xlv) を問うものと総括し、それは当時の社会の「法」に対してエマソンが考えていた「より高い法」つまり「精神の法」を対抗させる実際的な必要に対処するものであることを論じている。このように、エマソンにお

ける自然と “Mind and Manners” との関係を同エッセイ集に収められたエッセイ “Behavior” を例に考えてみる。

2 “Manners” から “Behavior” へ

The Conduct of Life に収められた “Behavior” は、*Essays: Second Series* 中の “Manners” とほぼ同じ内容であるが、“Behavior” の方が何度かの講演を経た洗練の結果であると考えられようが一つの段落が短く、多くの読者に訴える、学識を必要としない例証が使われている。たとえば、エマソン自身はその価値に否定的な「小説」も、Walter Scott 批判は両方の作品で変わらないが、英雄たちの逸話にはその「作法」に学ぶものがあると、肯定的な側面も語られる。“Manners” ではより抽象的思弁的に「紳士」と “fashion” (上流社会の慣習) という言葉を中心に、エマソンの基本概念が展開されていた。たとえば、“gentleman” という言葉を “heroic character” (英雄的人格) と定義し、“Power first, or no leading class.” (515) と簡潔な印象に残る言葉で主張をまとめる。この後、「政治、商業においては」と話が続き、“Power” の意味は権力と解釈される可能性も十分開かれている。しかし、この言葉はエッセイ “Self-Reliance” で “Power is in nature the essential measure of right. Nature suffers nothing to remain in her kingdoms which cannot help itself.” (272) と説明されたように、自然がもつ運命的な絶対性で生成変化する「力」を個人の「人格的な力」として表そうというエマソン的な自然と結びついた「自己信頼」の考え方であり、エッセイ “Manners” においてもそのようなものとして説明されている。別の箇所でも同様に、「自己信頼」を、個々人が王のように敬意を払われることと述べた後、“Let the incommunicable objects of nature and the metaphysical isolation of man teach us independence.” (522) というように、自然における「もの」のあり方と人間の精神とを関係づける説明がなされるが、あまり目立たない。おそらく、自然への言及は無視されるだろうが、政治や経済への言及は記憶に残るだろう。エマ

ソンは読者それぞれの文脈で理解される余地を残しておく。エマソンは一貫して、物質主義の時代に対して、精神の生活を擁護してきた。しかし同時に、匿名ながら処女作で「自然」というタイトルを挙げたように、「マルクスやコント、ダーウィンとともに、物質主義が社会的にと同様、知的にも地位を得ようになる 1850 年代」(Richardson 491) 以前から、科学に代表される物質主義に基づく観念論者であった。そのため、エマソンの物質主義も観念論も、ホーソーンの「中間地帯」のような微妙な領域を形成している。“manners” から “behavior” にタイトルが変わったのも、もちろん、同じタイトルを避ける必要があっただろうが、「紳士」という貴族的な観念で象徴されていたものを、より現代的に、民主的に、また、エッセイ集のタイトルにもふさわしく、行動的な用語に変えたと言える。

エッセイ “Behavior” は以下のように、“manners” を精神と身体との結合としての「もの言わぬ巧妙な言語」と定義することから始まる。

The soul which animates Nature is not less significantly published in the figure, movement, and gesture of animated bodies, than in its last vehicle of articulate speech. This silent and subtile language is Manners; not *what*, but *how*. Life expresses. Nature tells every secret once. Yes, but in man she tells it all the time, by form, attitude, gesture This visible carriage or action of the individual, as resulting from his organization and his will combined, we call manners. What are they but thought entertaining the hands and feet, controlling the movements of the body, the speech and behavior? (863)

「作法」とは、その人の「生」がどのように遂行されているかということを表す。自然の産物であるその人の身体を動かす「魂」や「思考」が、エマソンの「力」の表現であることがわかるのは、上記引用に続く段落の以下のような表現だ。

There is always a best way of doing everything, if it be to boil an egg. Manners are the happy ways of doing things—each once a stroke of genius or of love, —now repeated and hardened into usage. Genius invents fine manners, which the baron and the baroness copy very fast, and, by the advantage of a palace, better the instruction. They stereotype the lesson they have learned into a mode.

The power of manners is incessant, —an element as unconcealable as fire. (863)

「作法」を、まず、ものごとを行う「しあわせなやり方」だと定義する。『処世訓』らしく効率的な人の行為として定義しながら、エマソンは“happy”という言葉に人々に親しいものではあるが、単なる楽天主義ではない精神性をこめている。「作法」の起源を貴族という個人にではなく、誕生時の「守護霊」に由来する「霊的精神」という言葉で表現される普遍的な精神に求めている。それが彼らの「守護霊」になるとしても、まず、普遍的な「精神」或いは「愛」そしてその「力」が貴族となる人に取りついたという、エマソンの自然の生成のメカニズムに基づく考え方が示されている。エッセイ“The Poet”で述べたように、何事も最初は非人称的な“a stroke of genius”（霊的精神の一撃）(457)から始まる。言葉であれば、それを受け止めた詩人は個人的な存在であるが、その非人称的な共通の富、或いは力を表現できるという意味では、非人称的な存在でもある。個人がそのような「無限性」を獲得する可能性を「自然の方法」から学んだという意味では、エマソンの観念論は物質主義とつながっている。エマソンの観念論が、人々の物質主義に訴えるためには、言葉よりも「作法」はより肉体的なもので、自然が「一度語った」微妙な精神、エッセイの最後の言葉を使えば、“graces and felicities not only unteachable, but undescribable” (878) を人々に到達目標として明示しようとエマソンは考えている。これは容易に“genteel”とすり替わる危険性のある概念ではあるが、エマソンの思想の根幹が放つ魅力でもある。

Harold Bloom がエマソンはアメリカの宗教をキリスト教から「自己信頼」に変えたと大胆な提言をしたエッセイ、“Emerson: The American Religion”の中で、エマソン批評史上大きな影響力をもった Stephen Whicher の *Freedom and Fate* を最良の批評と評価する理由として引用したのも、以下のようにウィッチャーがエマソンの目指したものは「定義するのが難しい」と述べた部分であった (Bloom 163)。

But his true goal was not really a Stoic self-mastery, nor Christian holiness, but rather something more secular and harder to define—a quality he sometimes called *entirety*, or *self-union*

「全体性」や「自己合一」は、「私人の無限性」や「力」を前提としながら、大きな抽象概念としてではなく、普通の個人の実践の中に現れうる精神的なものの、人格の力に言及した言葉であろう。エッセイ “manners” では、紳士に必要なものとして、“force” と以下に取り上げる “perception” に加えて、“good-nature” つまり “generosity” を挙げている (524)。そのような人を上流社会は “*whole souls*” (525) と呼ぶと述べている。「健全な人」という言葉を上流社会がもっていることに、エマソンはいわば人類の希望を見ている。偉大なものが普通のものであるという可能性は、エマソンが “The American Scholar” (1837) で明言し、ずっと追求してきたものだった。「もっと世俗的で定義するのが難しいもの」の器、乗り物としてエマソンは “manners” や “behavior” を考えた。

貴族的な「作法」がその豪華な住居のもつ説得力で、「慣行」として人々に受け入れられたというのも、「家」に重きを置かないエマソンの、洗練された家づくりに勤しむ同時代⁴の物質主義への批評、皮肉のきいたユーモアだ。“Self-Reliance” の冒頭でも明言されたように、「霊的精神」がもつ、個人が心の奥底で真実だと思えることがすべての人々にとっても真実であるという力、“The Poet” では commonwealth” (448) とよばれる「力」に気づかせる同化力はエマソンにとって、重要な概念である。上記引用では続けて、その力 “the

power of manners”は「火」と同様隠しようのない「自然の元素」だと言っている。エマソンは「火」を自然が人間に与えたもののなかで「精神」を象徴するものだと考えている。上記引用中の「卵をゆでる作法」はエマソン愛用の冗談で、*Nature* では日常生活に埋没する人を揶揄した比喻、“We are like travelers using the cinders of a volcano to roast their eggs.” (24) の変化形であるが、火山の火ように創造的な力が空費されていることを指摘する。また、エッセイ “Experience” の冒頭では、土地の守護霊 “Genius” の機能不全で人々が「亡霊のように自然のなかを動く」と描写し、それは自然が “so sparing of her fire and so liberal of her earth” (471) であった結果だとして、そのような精気のない人間を「上流の工場のダムが水を消尽したと浮かべている下流の粉やのようなもの」(471) だと産業活動の比喻で段落を閉じる。そのような産業資本家と労働者が分化していく時代に、エマソンは東部アメリカ人の憧れの対象でもある「貴族」の「作法」を慣習から解放し、新しい定義を与え、貴族的な精神は時代や場所を超えて共通のものであることを例証しようとする。この例が、“Manners” では文化人類学的な知見を披歴するような講演を始める話題を受けて、ロンドンやパリと蛮族の酋長とを比べるというものであったが (519)、“Behavior” では、「近代の貴族」はティツィアーノの絵だけではなく、「ペリー総督が持ち帰った日本の高官たち」(866) にも共通であるというように、蛮族から日本人に変えられている。この絵の比喻も、時事的であるとともに、貴族の生活にならい、19世紀アメリカで「家」を飾るものが一大産業となっていたことに関わって、より一般大衆向けの比喻に変えられた例である。

エマソンはゴールへの直登ではなく、周期的な時間の中での螺旋型上昇をめざして、亡霊のような人々に、“A main fact in the history of manners” (867)、“this science of manners” (871) を示し、目を筆頭に各自が所有する身体が宿す「力」の在り処を示唆しようとする。「歴史」や「作法学」という言葉で、事実或いは現実を対象にする学問体系を意味している。「目」も “Manners” と共通の話題であるが、“Behavior” では “the wonderful expressiveness of human body” (867) というように物質的に、“the whole economy of nature”

と言うように自然の機能的に捉えていることが明言されている。動物の目とも比べられ、馬の騎手、野外で働く農民の目と自然の力を宿す目を挙げたうえで、“the action of the mind”の表現である目を論じる。“Behavior”の結論は、「作法」というぴかぴかのニスがはがれたとき、輝き出るのが前出の引用にあった「作法」の“*how*”ではなく“*what*”、つまり、“*reality*” (872)、その人の「生」の現実とは「強い意志と鋭い知覚力」とであると言う。それは“*Nature forever puts a premium on reality.*” (873) という自然に従う現実主義であり、「なされた事」が「直接」表現するものと言う。しかし効果のためになされたことと、愛のためになされたこととを見分けるのは、エマソンが断言するほど簡単ではない場合もある。よほど「鋭い知覚力」がなければその「現実」を知ることとはできない。エマソンは偉大な人は直截だと言い、“*Between simple and noble persons, there is always a quick intelligence.*” (875) と述べることには、経験的にも理解できる部分はあるが、やはり難しいと言わざるをえない。エマソンが英雄や友情を重視するのも、同質のものでなければお互いに理解できないということが孕む問題、人間に共通のものを認識することができるのが英雄だけであり、人々はそのような英雄を歓迎するということで共通性が担保されているという問題がある。エマソンはそのような微妙な英雄的資質を「紳士」がもつ“*personal and incommunicable properties*” (514) と呼んだ。「直観」という言葉がしばしば揶揄として使われるような社会にあって、観念論のもつ現実性を説得しようとするとともに、物質主義の時代の価値観に染まった人々を彼らが理解できる言葉で教育しようとする。

3 物質主義の時代の Public Intellectual

エマソンは1842年の講演、“*The Transcendentalist*”においても同時代を「物質主義の時代」と呼んだが、50年代はそれがまたいっそう顕著になった時代であり、それを象徴する出来事が南部奴隷州が望んでいた“*Fugitive Slave Law*”（逃亡奴隷法）がマサチューセッツ州選出の上院議員、当時は国務長官

Daniel Webster の支持によって成立したことであつた。Barbara Packer は前述のハーバード版で、イギリスから帰国後のエマソンが体験したカリフォルニアの領土獲得と奴隷制の拡大をめぐる問題を詳細に論じている。1850 年に「逃亡奴隷法」の法案が議会を通過した直後から、エマソンはイギリス法の書物を参照しながら、ウェブスターが “higher law” を嘲笑したのに対し、イギリス人が「制定法よりもより高い法」、つまり、「神自身によって定められた自然の法」を考えていたことに慰められた (xxix)。政治経済上の野蛮な行為について、それは生物にも見られることだとエマソンが考えたという、Packer が挙げた以下の引用文は、エマソンが「自然法」の考えを展開させて、“natural history” という準拠枠による「自然の法」を持っていることをよく表している。

...the animalcule system is of ferocious maggot & hideous mite, who bite & tear, yet make up the fibre & texture of nobler creatures. (JMN 11:284)

「逃亡奴隷法」はエマソンにとっては、「自然の法」について考えを深める機会となった。そして、エマソンの名声の高まりはそれをより広範な人々に伝える機会を提供した。エマソンは 1847 年出版の *Poems* 所収の “Ode Inscribed to W. H. Channing” の中で、1844 年の大統領選で奴隷制容認のポーク大統領を支持したニューハンプシャー州を非難しているが、その大統領選直前の 8 月には、奴隷制に反対する女性団体の求めに応じて、コンコードで「英領西インド諸島における奴隷解放」について講演をしている。しかし、基本的には “Ode” が社会改革家たちに批判的であるように、「逃亡奴隷法」成立までは、エマソンの日記の記述「学者の徳は紙の上だけのものである不運」(Packer xxix) が示すように、エマソンは自身を活動家ではなかったと考えていた。エマソンは奴隷の逃亡を助ける「地下鉄道」のメンバーでもあったが、1851 年 4 月に逃亡が当局によって阻止された事件を契機に、エマソンは活動家に転じ、5 月にはコンコードで逃亡奴隷法について話をしている (Richardson 496)。活動家といっても、活動内容は講演をすることで以前と変わらないが、その内容が政治的に

なったということだ。コンコードの人々に対してエマソンはこう語った。

The only benefit that has accrued from the law is its service to education. It has been like a university to the entire people. It has turned every dinnertable into a debating club, and made every citizen a student of natural law. (LL 1:269)

この時もエマソンは、「学者・考える人」に対して話をするという姿勢で、より多くの人々が「自然法の学者」になったと、聴衆の変化に重きをおき、自身の仕事は変わらないという姿勢を示唆している。

しかし、このテーマでの講演は、Free-Soiler に属する下院候補者のためにマサチューセッツ各地で繰り返されるように (Packer xlii)、これまでの職業団体や市民文化向上のための講演に比べ政治色の強い文脈でなされた。このことが、“Public Intellectual” のもう一つの意味、Richard Posner による最近の定義によると、文化的な事柄もイデオロギーや倫理、政治の相で見られれば政治的な事柄とみなすという、広い意味での「政治を論じる人」という側面をエマソンに加えることになる (Buell 42)。内容的にも「逃亡奴隷法」についての講演は、自由を愛するマサチューセッツの歴史における、ウェブスターの背信を批判するものであり、“Public Intellectual” の現代的な定義になじむものと言える。1854 年にニューヨークで行われた講演はエマソンが政治的な事柄を論評する “Public Intellectual” としての自覚をもっていたことを示している。その冒頭で以下のように長い言い訳を述べていることは、原稿が講演当日まで完成しなかったという事情もあろうが (LL 1:333)、「W.H.チャニングへの頌詩」における姿勢からの転換が必ずしも本意でないことを示しているだろう。

I do not often speak to public questions; they are odious and hurtful, and it seems like meddling or leaving your work. I have my own spirits in prison, spirits in deeper prisons, whom no man visits, if I do not.

My own habitual view is to the well-being of students or scholars, and

it is only when the public event affects them, that it very seriously affects me. (LL 1:333-334)

ウェブスターはアメリカの「紳士」とみなされてよい人であることを考えれば、エマソンのウェブスター批判は“Manners”と変わらないと言うこともできる。上の引用の監獄の比喩は、エマソンの1840年10月17日の日記の記述、ブルック・ファームへの参加を断ったときの以下の理由と同じである。

I do not wish to remove from my present prison to a prison a little larger. I wish to break all prisons. I have not yet conquered my own house. It irks and repents me. Shall I raise the siege of this hencoop & march baffled away to a pretended siege of Babylon? It seems to me that so to do were to dodge the problem I am set to solve, & to hide my impotency in the thick of a crowd. (JMN7:408)

エマソンは50年代の講演、エッセイにおいても「私人の無限性」を変わず追求している。エマソンが1841年1月発行の*Dial*に寄稿した短い詩、“*Suum Cuique*”(各々にとって自分のもの)に、“Nature shall mind her own affairs;/ I will attend my proper cares”(1116)と自然の作法に倣うという意志が述べられる部分がある。政治的な発言はエマソン本来の仕事ではなかったかもしれない。講演の冒頭の「牢獄」への言及は、そのような意識を表し、また、普通の人々に対して「制定法」に代わるエマソンの自然観が明示的に語られることも少ない。しかし、ウェブスターの背信が代表する時代の物質主義に“Public Intellectual”として対峙した経験が、個々人の「作法」を問いかける試みとして、*The Conduct of Life*において自然の法を理解できる形で表現する必要性をエマソンに感じさせたと言うことはできよう。

注

1. エマソンのエッセイと詩の引用は、*Ralph Waldo Emerson: Essays and Poems* (Library of America College Edition), eds. Joel Porte, Harold Bloom and Paul Kane (New York: The Library of America, 1996) による。エマソンによる他の著作については、その署名を略号で表した。
2. 拙論「エマソンの「歴史」と「自然史」」(三重大学英語研究会 *Philologia* 第47号, 2016) pp.41-51 参照。
3. “Life in the Woods”の意味については、渡辺利雄氏の講演録「Waldenを読む—原作と翻訳の間にある距離」(『ヘンリー・ソー研究論集』第41号、2015年、pp. 51-60) に詳述されている。
4. Richard L. Bushman, *The Refinement of America: Persons, Houses, Cities* (New York: Alfred A. Knopf, 1992) 参照。

引用文献

- Bloom, Harold. *Agon: Towards a Theory of Revisionism*. New York: Oxford UP, 1982.
- Buell, Lawrence. *Emerson*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2003.
- Bosco, Ronald A & Joel Myerson, eds. *Emerson in His Own Time*. Iowa City: U of Iowa P, 2003.
- Cabot, James Elliot. *A Memoir of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols. Boston and New York, 1895.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. 16 vols. Ed. William H. Gilman, Alfred R. Ferguson, George P. Clark, et al. Cambridge: Harvard UP, 1960-82.
- , *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols. Ed. Ronald A. Bosco & Joel Myerson. Athens: U of Georgia P., 2001.
- , *The Letters of Ralph Waldo Emerson*. 10 vols. Ed. Ralph L. Rusk & Eleanor M. Tilton. New York: Columbia UP, 1939-95.
- Hawthorne, Nathaniel. *Mosses from an Old Manse*. Ed. William Charvat et al. Vol.10 of

The Conduct of Life におけるエマソンの自然観

The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1974.

Packer, Barbara. Historical Introduction. *The Conduct of Life*. Vol.6 of *The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*. 10 vols. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2003, pp.xv-lxvii.

Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire: A Biography*. Berkeley: U of California P, 1995.

Santayana, George. "The Genteel Tradition in American Philosophy." *University of California Chronicle*. October 1911. monadnock net/santayana/genteel.html.